逃避行

空洞化された和音の中へ分け入れば
自由な空間のトンネルを通じて
歩くことが御前の義務、と声がする

恋人は苦しげな肌でまとわりつき
床は冷たく光り
天上は円く高く

縦横無尽に飛び交う影は
清く澄んだ冷気をかき乱し
味気ない空間を食うに耐えるものにする

押し潰された魂は道連れを好み
しがみついたら決して離さない―――
これを寂しさの故と人は言う

楓紅葉(かえでもみじ)の雲は僕をして踏み外せしめる

家庭を、幸福を、そして陽光を
残虐と渇望へと

「何も知るべきではなかった」と彼女は言った

貧しい美のかすをつまみ上げて・・・

僕たちは逃げ続けるしかなかった

やがて夜ともなろう
吐いて、吐いて、吐くだけの
眠りにさえも見離された苦しい抱擁とともに

(1989.9.20)